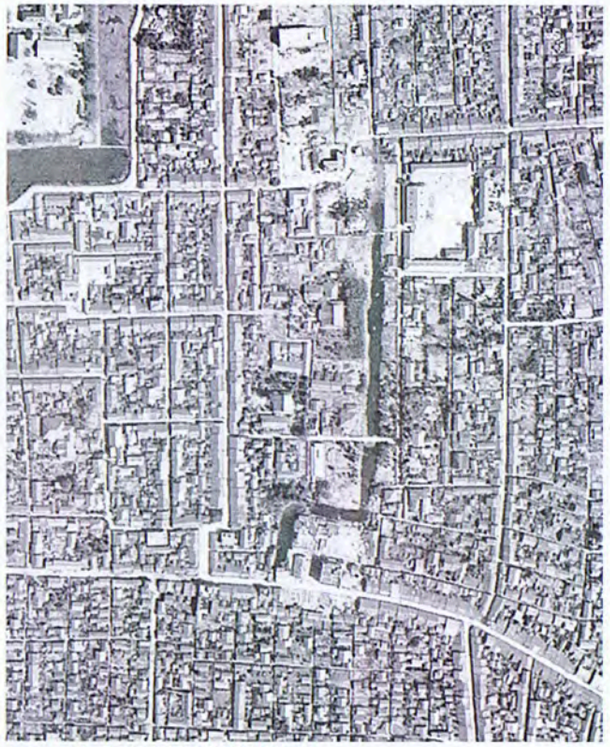
あやしい取材班

外堀の痕跡を探る

2018年11月25日(日)晴れ

油懸口御門から高宮口御門までがゴールデンルートだ！

彦根城の内堀と中堀の周りを取り囲むように、素掘りの外堀と土で盛った土塁があった。み～な取材班は、街の真ん中にあった外堀の痕跡を「まち遺産ネットひこね」の主宰者、鈴木達也さんの案内で探索した。



▲1946年当時の外堀跡（国土地理院）

油懸口御門から高宮口御門へ

外堀がどの辺りにあったかというと、お城の南側は銀座街からびわ湖方面へ真っ直ぐに延びる、昭和新道と呼ばれる道路、これが外堀跡だ。昭和9年から10年にかけて、外堀を埋め立てて造成された。

お城の東側は少し複雑だが、彦根商工会議所とNTT彦根支店のビルがある辺りを南北に引いた線くらいと想像してほしい。

お城の北には松原内湖がびわ湖まで広がっていた。駅前道路をお城方面へ突き当たった所に護国神社と市民会館がある。その前にある空堀が外堀の一部で、北へ延びて船町交差点の手前で松原内湖に通じていた。

外堀の痕跡を探すとなると、お城の南側と東側だが、かなりの距離があり、ルートをしぼって探索する必要がある。「まち遺産ネットひこね」の鈴木達也さんに伺うと、油懸口御門から高宮口御門までがゴールデンルート、とのこと。

鈴木さんにご無理を承知のうえで案内をお願いしたら、快諾していただいた。外堀探索ツアーの参加者は、み～なスタッフとその家族など総勢10人近く。怪しさいっぱいだ。

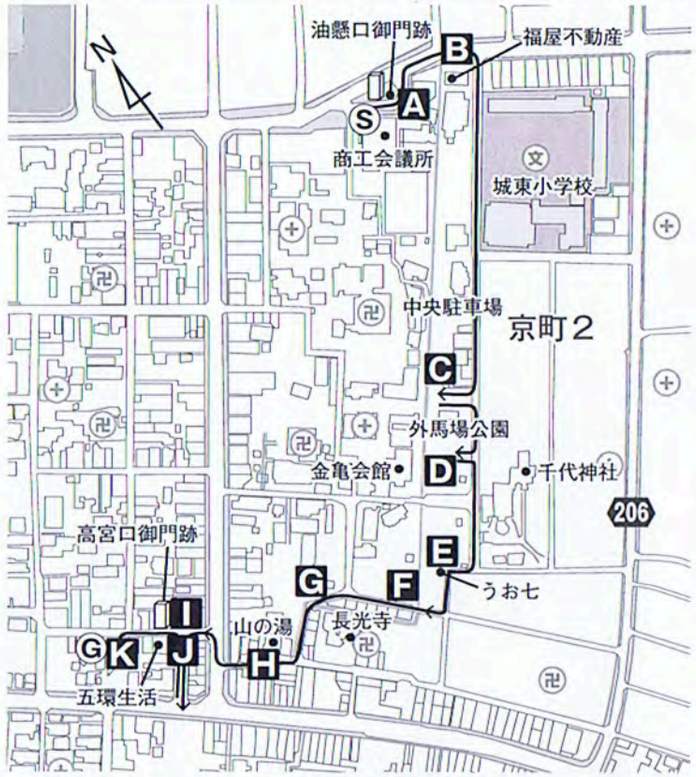
商工会議所前のクランクは虎口

待ち合わせ場所は油懸口御門跡、つまり彦根商工会議所前だ。あいさつもそこそこに、鈴木さんの説明が始まった。

「商工会議所の玄関前で道がクランク状に折れ曲がっています。昔はこの道が御門前の道でした」

つまり商工会議所前の道路Aは、二等辺三角形の二辺が玄関前を通り、長辺の斜めの道路は後から付けられたということだ。

往時、外堀には7つの橋と門が設けられていた。ここで城内への通行をチェックしたわけだ。そして、門の前が防御に適した喰い違いの虎口になっていた。商工会議所前の直角の二辺が虎口だったわけだ。



▲福屋不動産横で鈴木さんの説明を聞くB

▲油懸口御門跡の碑A

▲商工会議所前から出発A

道路を挟んで北側に、NTT彦根支店の大きなビルが建っている。鈴木さん作成の『彦根城外堀マップ』で確認すると、NTTビルは外堀の真上にあるが、ビルの裏手に細い水路が残っているようだ。

商工会議所から南へは、幅2mほどの水路が続いている。これが外堀の痕跡だB。水路の横にある福屋工務店のお店が、外堀の上のようだ。

ここから南へ、城東小学校のグランド横の道路を進むと、グランドの反対側に市営中央駐車場が現れる。両側一列ずつしか駐車できない細長い駐車場だが、ここが外堀そのものなのだ。

駐車場と住宅敷地に2mの段差

「僕はこの段差で外堀に目覚めました」と鈴木さん。彼が指差す先には、駐車場の路面から2mくらい高くなった敷地に住宅が並んでいるC。一同「オーッ」、「すばらしい」と感嘆の声。

駐車場の南側には外馬場公園が続いている。この公園も細長くて、外堀をイメージしやすい。公園の中にクスノキなどの照葉樹が一直線に並んでいるが、これは外堀沿いにあっ

彦根の街の大きな魅力
足軽組屋敷

▲芹橋二丁目の町並み

銀座街やベルロードなどの幹線道路から小路へと、車も通れない小道を歩くと、迷路のようなワクワク感、ホッとする居心地の良さ、歴史の重なりを実感する。この街はいったい何なんだ！　その疑問を解明しよう。

彦根入封前に400人近くの足軽

彦根の街の価値を高めているものの一つに、足軽組屋敷がある。とりわけ芹川と銀座街の間に広がる一帯は、細い道路が碁盤目状に走り、足軽屋敷だった建物がたくさん残っている。それらは門を構えた庭付き一戸建ての家で、小さいながらも武家屋敷の体裁を整えている。江戸時代の足軽の暮らしを伝える貴重な歴史文化遺産である。

足軽の発生は平安時代ともいわれるが、足軽が本格的に活躍するのは戦国時代からである。戦の規模が大きくなり集団戦になっていくと、各武将が訓練された弓や鉄砲の足軽隊を組織した。

井伊直政は、佐和山に入封する前に少なくとも12組390人の足軽を抱えていたといわれる。関ヶ原の戦いが終わり、井伊家は家康から彦根山への築城の許可を得て、慶長9年（1604）に築城を開始する。並行して城下町の建設も始まり、芹川の付け替えや堀の開削などの大規模な土木工事がおこなわれていった。

石高増に伴い足軽組も増加

最初に足軽組屋敷が設けられたのが、芹川と外堀の間にある「善利組」、「中藪組」、「池須町組」である。大坂冬の陣の前には、足軽の数が18組425人に増えていた。大坂の豊臣方に対する防御を強固にするため、城の南側にある外堀の外側で、しかも新たな堀の役目も持った芹川の手前に軍隊を集住させたのである。

その後、2代藩主になった井伊直孝は大坂の陣での活躍もあり、3度にわたって加増を受け、当初の15万石から30万石へと領地が大きくなっていく。江戸時代は石高に応じて軍勢の数を準備する必要があったため、石高の増加に伴って足軽も増えていった。

大坂夏の陣の後、最初の「善利組」12組の東側に、新たに「善利組」6組が加えられた。その後も加増されたため、外堀の南側だけでは足軽屋敷の土地が確保できない。そこで東部の上組や中組、北組といった足軽組屋敷が、町人町の外側に設けられた。

足軽が最も多くなるのは寛永10年（1633）で、37組1120人にまで達した。足軽を大きく鉄砲組と弓組に分け、鉄砲組は主に40人と30人を一つの組として31組に分けた。弓組は20人ずつを6組に分けた。

平時足軽はさまざまな仕事に従事

同じ組の者は、同じ町内の通りの両側に集まって住んだ。著者が中学生だった頃、鐘紡長浜工場の中にあった友達の家に遊びに行った。その時、同じ大きさの平屋建ての家が、ずらっと並んでいて迷ってしまったことがある。足軽組屋敷は、大企業の社宅群と似たような風景だったのかもしれない。

また組ごとに「物頭（ものがしら）」と呼ばれるリーダーがいて、戦時には足軽大将として指揮をとったが、物頭の住まいは別の場所にあった。代わりに、足軽を束ねる「手代」2人が組に居住して、物頭の代理を務め軍事訓練などを指揮した。手代は、いわば中間管理職といえる。

しかし、平和な時代に矢場や河原で弓・鉄砲の練習ばかりしているわけにはいかない。平時、彼らはさまざまな仕事に従事した。まずはお城の周りにあった11の門の番をはじめ、お城周辺の警備がある。

次に下役人としての仕事。彦根藩には行政機構として普請方、作事方、町方、筋方などがあり、それぞれに普請奉行、作事奉行、町奉行、筋奉行がいた。それらの奉行のもとで実務を担ったのが主に足軽だ。

組ごとに相互扶助の仕組みも

なかでも足軽が多かったのが普請方、今の役所でいえば土木課にあたる。城下の石垣や道路、河川の整備や補修、管理などを担当した。当時の普請方の日記には、いろんな仕事が記録されている。文化9年（1812）のことだ。

右記の土木工事のほかに、上水道に溜まった泥の浚渫、城下町の草取り、冬の雪かき、武具甲冑の虫干し、火事・傷害事件の立ち会いなどなど。土木課というよりも、何でもやる課といった感じだ。

苦労は多かったが、同じ組の者たちはお互いに助け合って暮らした。例えば組で「講」をつくり、一定のお金を積み立てて、講員が困ったときに貸し付ける金融制度を設けたり、組の足軽が亡くなると、皆がその家族に扶持米を援助するといった相互扶助の仕組みが作られていた。しかも20俵以上の給与がしっかりと支給された。

彦根藩の足軽は、他藩の足軽に比べるとかなり恵まれていたのだ。他藩では足軽の住まいが長屋だったり、なかには苗字を名乗ることも許されず、町人と同じ扱いをされたりする藩もあったという。

天保7年（1836）に描かれた彦根藩の『御城下惣絵図』（4―5頁参照）を見ると、足軽組屋敷にも小さな字で足軽の名がびっし

▲善利組周辺の案内板。外堀と芹川の間に整然と町割りがされているのが分かる

▲「善利組足軽組屋敷」の表示